

「子どもと交通社会」特集にあたって

森田 朗*

1. はじめに

最近、日本社会の高齢化に加えて、少子化が問題となっている。そして現在、住宅、保育、教育等の分野で、子どもを産み、育てていくためのさまざまな施策が実施されている。だが、それらの施策の多くは、子どもたちの視点に立って作られた、子どもたちのための施策というよりは、むしろ確実に到来する高齢社会を支える人材をいかに育成するかという、大人の視点からみた施策ではないだろうか。

このことは、子どもの交通安全のための施策についても当てはまる。たしかに一時と比べて交通事故による子どもの犠牲者の数は減ってきている。それが過去の努力の成果によるものであることもまちがいないだろう。だが、交通事故は、いまだ子どもの不慮の事故死の原因のトップであり、さらに事故の状況は以前と比べて大きく変わってきている。かつては少なかった自動車同乗中の事故が増えているのである。そこには、明らかに社会の変化、すなわち自動車をめぐるライフスタイルの変化がみられる。そのような変化への的確な対応なしには、交通事故による子どもの犠牲者はなくならないであろうし、交通社会における子どもの健全な成長も期待できないのではないだろうか。それには、子どもの視点に立った施策の形成が何よりも大切であろう。

この特集では、このような問題意識に基づいて、「子どもと交通社会」と題し、現代の交通社会における子どものための施策のあり方、とくに子どもの交通安全や子どもたちに対する交通安全教育の問題を取り上げた。このような問題を取り上げた前提として、交通社会における子どもは一般の大人とは異なった行動特性を有し、それゆえに特別の配慮が必要

であるという認識がある。もちろん、子どもといっても乳幼児から小学生、さらに中学生、高校生まで、その成長の程度に応じて行動特性も異なるが、ここでは、最も配慮を要する幼児期から小学校低学年の子どもたちに焦点を当てている。彼らこそ、交通社会においても最も保護を要するとともに、正しい交通安全教育が必要とされる世代と考えられるからである。

このような観点からみて、子どもの交通安全の問題、さらに視野を広げて現在の、そしてこれからの交通社会における子どもの健全な育成を図るための施策を作ろうとするならば、まず第一に、子どもたちが暮らしている街で、彼らがどのように自動車や人の動きを認識し、どのように行動するのか、という子どもの行動特性を大人がしっかりと理解することが必要である。第二に、子どもたちの交通安全を考えると、社会的弱者ともいえる子どもたちの保護も重要であるが、単に弱者を保護するというのではなく、彼らを、将来、自身と他者の安全を守り、正しい通行や運転ができるような、よき交通参加者に育てていくことが重要である。子どもたちもいずれ若者になり、大人になり、さらに高齢者になっていく。そして、今度は彼らが次の世代の子どもたちを育てていくのである。

2. 子どもの行動と交通安全

子どもたち、とくに幼児から小学校低学年ころまでの子どもたちは、大人とは違った行動特性をもっている。彼らは、好奇心に満ち、自分が関心をもっているものに集中し、他のことは顧みない。そして、満足が得られたときには素直に感動を表す。その感動の追求が遊びであり、子どもたちは遊びを通して豊かな心を作り上げていく。

このような子どもたちが認識する世界も、当然、大人が認識している現実の世界とは異なっている。

* 東京大学法学部教授
Professor, Faculty of Law,
University of Tokyo

豊かな心を育てるためには、たしかに、このような子どもたちのもつ世界を大事にし、それを維持することも必要である。しかし、現実の世界はそれとは異なり、危険に満ちている。子どもたちは、自らの体験を通して、また親による、あるいは社会による教育を通して、次第に現実の社会がいかなるものであるかを学習していく。けれども、子どもたちは、成長につれて学習していくのであって、学習プロセスにおける不幸な事故を防ぐためには、彼らができるだけ早く学習できるように支援することに加えて、大人の方で彼らの行動特性をよく理解し、安全な交通環境を整えなければならない。

それには、まず第一に、子どもが遊びに集中しているときにどのように行動するか、等の子どもの行動特性をよく把握し、運転者をはじめとして大人が危険な状態を作り出さないようにしなければならない。飛び出し事故や通学中の事故を防止するには、このような行動の理解が不可欠である。

第二に、現実の世界は、たしかに子どもにとっては不愉快な世界であり、それへの適応は苦痛であるかもしれない。しかし、現実の世界の危険を知り、それを避けることを学習させるためには、大人の側のしっかりとした配慮も不可欠であろう。最近増えている同乗中の事故を防ぐためには、たとえ子どもたちがいやがろうとも、チャイルドシートやシートベルトの装着を、何よりも大人が励行することが重要である。

第三に、いかに子どもの行動を理解し、大人が安全への配慮をしても、子どもの行動特性は基本的に変わらないだろうし、それを変えようとすることは本来望ましいことではない。むしろ、子どもたちが安全でしかものびのびと暮らせるような社会を作るためには、私たちが住む街自体を、大人本位の、車中心の街から、子どもたちの生活により適した街にする必要があるだろう。遊びのための安全なスペースを十分に確保したまちづくりこそ、長期的な視点からは、取り組まなければならない施策といえよう。

3. 交通安全教育

日本でもこれまで交通安全教育は行われてきたが、それが目指してきたのは、どちらかといえば自分で安全を守ることのできない子どもたちを、危険な自動車交通から保護することであった。そのため、危険を避け、ルールを守り、保護者の指示に従うことが教育されてきたのであり、あくまでも弱者として

の現在の子どもを保護するという視点が強調されてきたといえよう。

しかし、子どもは、上述のように、成長し学習する。もちろん子どもたちを危険から守ることは必要であるが、それだけでは将来の交通社会の立派な担い手は育たないであろう。それを育てるためには、単にルールを覚えさせ、それを守ることを教えるだけではなく、交通の仕組みとはいかなるものか、事故はどのようなメカニズムで起こるのか、それを回避するためには、どのように行動しなければならないのか、等について自分で考えて行動することを教えるなければならない。しかも、それを頭の中だけで教育するのではなく、実際の体験を通して、自分で考えさせ、身体で覚えさせることこそが大切なのである。このような教育は、彼らが将来次の世代の子どもたちを教える立場に立つことを考えれば、とくに重要である。

このような観点からみたととき、日本の交通安全教育は、学校だけがその担い手であり、まだまだ改めるべき点が多いようである。海外では、より進んだ教育が行われているところもある。たとえば、親、学校、そして社会が交通安全教育の役割を分担するとともに、安全のための装置も組み入れた安全教育のためのシステムが形成されているところもある。大いに参考にして、日本の交通安全教育のあり方も再検討されるべきであろう。

この特集では、以上のように、子どもの視点に立って、交通社会と交通安全施策を論じてみた。これまで見落とされていた論点に光を当てることになることを期待したい。